
指輪の魔法

canceler

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

指輪の魔法

【Nコード】

N2525I

【作者名】

canceler

【あらすじ】

普通の町で普通に高校生活を送って、普通に大人になっていく。そう思っていた。それが普通だと思っていたのに・・・。

日本でしか使えない指輪の魔法。日本でしか使えないがために国際化社会において消え去ったはずの魔法。そんな魔法と、少年少女達が繰り広げる日常非日常。人々の想いが交錯する現代ファンタジー。

・・・の予定です。

通いやすさが売りだ！

羽柴市。
はしば

私が住むことになった町の名前です。

紫色の羽と書いて、羽柴市。

特別有名な観光地とかじゃなく、普通の町。

東側に、隣町との境になっている山があつて、そこから町の真ん中を東西に川が流れています。

5年前に、大きなガス爆発の事故があつたらしく、町の南側では、再開発のための工事が行われています。

私の通うことになった高校は、その再開発地区とは反対の北側にある「山楽高校」です。

この高校は、羽柴駅から徒歩10分。通いやすさが売りだ！って未来ちゃんが言っていました。

未来ちゃんっていうのは、私が転校して最初の友達で、眼鏡の似合う可愛い子です。

あつ、ごめんなさい。

自己紹介がまだでしたね。

はじめまして。
島倉しまくら
一美ひとみといいます。

通いやすさが売りだ！（後書き）

はじめまして。cancelerと申します。

こんな文書を読んでいただきありがとうございます。

初作品ですので、至らない点は多々あると思いますが、ご意見、ご感想をお待ちしております。

割とゆっくり、長く続けていくつもりですので、よろしく願います。

第一印象が大事っ

5月6日。

ゴールデンウィークが終わって、なんとなく憂鬱な月曜日。

いつものように早起きをして、いつものように始業チャイムの5分前に教室に入った啓介を迎えたのは、

「啓介おっはよー！ひさしぶり！ゴールデンウィークは何してた？」

「徹也うるさい！もうすぐ先生くるんだよ！あっ啓介、おはよう」

テンションの高い級友たちだった。

「ああ、おはよう徹也、未来」

と言いつつ自分の席につくと、後ろの席の徹也が身を乗り出して話しかけてきた。

「なあなあ知ってるか？」

「知らないよ」

とりあえずうるさいので、出鼻を挫いてみだが、

「今日このクラスに転校生が来るんだぜ」

無視された。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どんなやつだろうな？噂では女子って話だけど、かわいい娘だったらしいよな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事をしてはいけない。してしまったらまたいつもの繰り返しじゃないか・・・

「ああ、楽しみだなあ。早く来ないかなあ」

もう少しの辛抱だ。もうすぐ終わる。前を向いていればいい。

「なあ、啓介もそう思うだろ。思わないわけないよな」

「ああもう！うるさい！般若のばあが来ちまうだろ！」

そう振り向いて叫んだ後、激しく後悔した。つい我慢できず反応

してしま・・・

「誰が『般若のばあ』だつて？」

背中に刺さる鋭い視線。冷やかな声。徹也の顔を見ると・・・にやけていやがる。確信犯か、こいつ。

「ゴールデンウィーク明けで気が緩んでるんじゃないか？佐上」

恐る恐る振り返ると、この2・Aの担任、半田^{はんだ}麻里子^{まりこ}が教室の扉のところで仁王立ちしていた。こめかみに浮かぶ青筋は自分の目の錯覚だろう。いや、そうであってほしい。そうじゃないんだろうな！。

「まあいい。今日はやらなければならんこともあるしな」

「転校生の紹介のことだ」

後ろから徹也が囁いてきたのを聞いて、助かったぞ転校生！と、好感度を10ぐらい上げたところで、

「佐上と進藤はあとから職員室に來い」

と言われ、

「俺もですか？」

「あたりまえだ」

という徹也と半田のやり取りを聞きつつ、啓介は転校生への好感度を30下げた。

~~~~~

勝手に好感度を下げられているなど思いもせず、教室の外では転校生の一美が、先生に呼ばれるのを待っていた。

あゝときどきするな。転校なんて初めてだもんな。でもびしつと決めるぞ！第一印象が大事っていうもんね！よし、やるぞ！私！

などと1人で呟いていて、人に見られたら第一印象が間違いなく「変な子」になる状態で・・・

「じゃあ、入って来い」

扉が開いて先生に呼ばれたのを確認した後、大きく深呼吸を1つして教室へと入る……と同時に転んだ。盛大に。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙。ちなみに、3つの沈黙は上から一美、半田、教室内の生徒である。

「……大丈夫か？」

沈黙を破ったのは、半田だった。

「……大丈夫……じゃない……です」

よろよろと起き上がって、そういった後一美は教室を出て行った。

~~~~~

「はじめまして。島倉しまぐらひ 一美ひとみといいます。種子島の島に倉敷の倉で島倉、一美は数字の一に美しいと書きます。以前は岡山のほうに住んでいて、父の仕事の都合でこっちに引っ越すことになりました。これからよろしく願います」

3分ほど教室の外で心を落ち着かせた後、

「仕切り直しです！」

と言って入ってきた後の自己紹介。

自己紹介としては100点満点なのだろうが、その前にあったことが響いているのか、気まずい空気の中に、一美の声が虚しく響いた。

どうしよう、なんか変な空気だよ。

と1人でパニックになっていると

「はいはい質問！」

男子の1人がてを上げていた。

一美は、この気まずい空気を変えるチャンスだわ！と意気込んで、

「はい！なんですか？」

「スリーサイズを教えてください」
固まってしまった。

「あ、あんた何聞いてるのよ！！」

隣の席の眼鏡の子が突っ込んでいる。

「進藤・・・」

担任の先生があきれている。

クラスみんなはそれを見て笑っている。

どうやらこのクラスでは日常のことらしい。

空気も和んできたし、ちょっといい感じかも。

一美の予想通り、その後は普通の質問が少し出たほどで、無事（？）自己紹介は終わった。

第一印象が大事っ（後書き）

cancelerです。

第2話です。話が進みませんでした。魔法の登場は5話・・・6話にはしたいと思います。

次回は昼休み。啓介と一美のファーストコンタクトです。これからよろしく願います。

寝言は寝てから言いなさい

4時間目が終わって昼休み。本来なら、転校生の周りには多くのクラスメイトが集まって賑やかな風景が繰り広げられているはずだが……一美の机に向かおうとする生徒は1人としていなかった。それは決して彼らが冷たいわけではなく、（実際は何人も生徒が一美に話しかけようとしていて）一美が発する視認出来そうなほど濃い負のオーラがそうさせているのだ。彼女のこのオーラは、自己紹介が終わって1間目が始まってから今（昼休み）まで、途切れることは無い。授業中でさえ机に向かったまま俯いている姿は、教師も引いたくらいだ。その原因はというと……

あうゝ、何であんなところで転んだんだろゝ。第一印象最悪だよ。せつかく頑張って自己紹介の文章考えてきたのにゝ。

やはりというかなんというか、朝の一件のことであつた。そんな一美に声をかける生徒（ゆうじや）がいた。

「どうしたの？ 島倉さん」

「どうしたの？ 島倉さん」

一人で自己紹介の反省会をしていた私はそんな風にかげられた声に反応して顔を上げた。

「気分でも悪い？」

声をかけてきたのは、ショートヘアにハーフフレームの赤い眼鏡をかけた子。自己紹介のときに突っ込みを入れてた子だ。でもどうして気分が悪いかなんて聞いてくるんだらう？

「大丈夫だよ。えっと…」

「そっか、名前まだ言っていなかったね。私は西條さいじょう 未来みき。未来って呼んでね。これからよろしく」

「うん。よろしくね未来ちゃん。私のことも一美でいいよ」

「わかったわ、一美。で、何かあったの？ 悩みなら聞くんよ」

また聞かれた。

「えっ、私そんなに辛そうにしてた？」

そう聞いたら未来ちゃんの顔が少し引きつった。

「一美、すごいどんよりとしたオーラを出してたよ。午前中ずっと」
「本当？」

そんなに酷かったのだろうか。まあ少し落ち込んだのは確かだけれど……

「ほんとだよ。みんな近づけなかったんだから。で、何落ち込んだの？」

三度聞かれる質問。

「えっとね、なんていうかね、今朝のことなんだけど……転んじやつたでしょ、私。恥ずかしかったな……」

「……えっと、それだけ？」

「そうだよ！　だって私さ、前の学校ではよく転んだり失敗したりして友達に『一美ってドジだね』とか『天然だね』とかって言われてこの転校を機にそんなイメージを無くそうって決めてたのに……はあ」

自分で熱弁してまた落ち込み始めた一美を見て、未来は「あ、この子本当に天然なんだな」と思った。

「わかったからまたそんな風に落ち込まないで、お弁当食べよ」

「……うん」

その後は、（一美の雰囲気が普通になったので）クラスメイト達も一美に話しかけたり、一緒に食事してよいかと尋ねてきたりと、賑やかな普通の昼休みの風景になっていった。

昼休みも残り10分ほどになって、私が未来ちゃんと恵子ちゃん（榎本 恵子 えのもと けいこ）同じクラスで女の子にしては背の高いほう。テニス部に入ってるらしい）の3人していると、2人の男子生徒が教室に入ってきた。

1人は背が高く顔の作りも悪くない、一見美少年っぽいけどど

こか軽薄そんな感じがする。名前は……進藤君だったはず。

もう1人は、どこにでも居そうなこれといって特徴の無い人。あえて特徴を探すなら、髪が染めたように真っ黒なところだろう。まるで対照的な2人。

「あの2人はこのクラスの問題児よ」

2人を見る私の視線に気づいたのだろうか。未来ちゃんがそう言ってくる。

「そうなの？」

「そうよ。今だって2人して職員室に呼び出されてたんだから。特に進藤——背の高いほう、あいつには気をつけなさい。バカだからバカだから。うわー言い切ったよ……恵子ちゃんも頷いてるし、と思っていると、

「バカとはひどい言われようだな」

後ろから声がした。振り向くとそこには未来ちゃん曰く問題児が2人そろって立っていた。

「はじめまして、一美ちゃん。俺、進藤 徹也。よろしくね」

「佐上 啓介だ」

「こちらこそよろしく」

話し方も対照的な、この2人。

「おい未来！ 転校生に悪い先入観を植えつけるな！」

「初対面でいきなり『スリーサイズを教えてください』なんて聞いている時点でイメージも何もないわよ！ このバカ！」

進藤君と未来ちゃんが言い争いを始めた。

「またっ、この学年トップの成績を持つ俺に向かってバカバカと連発しやがって……」

進藤君が学年トップ??

「はっ、寝言は寝てから言いなさい」

「すみません。寝てました」

謝っちゃった。嘘なんだ。

なんとなくほっとする一美だった。

そんな一美を置き去りにしてますますヒートアップしていく2人。

「どうしよう……止めたほうがいいのかな」

とりあえず一美は傍観している恵子へと助けを求めた。

「大丈夫だよ。いつものことだから。それに……」

「それに？」

「あいつが止める」

「2人もストップストップ。島倉が困ってるし、そろそろ予鈴だ」
突然かけられた声は啓介のものであった。

「……わかったよ」

「……わかったわよ」

素直に従う二人。

「あいつら3人は中学からの知り合いなんだ。特に徹也と未来は幼馴染。言い争いなんてあいつらにしたら挨拶みたいなもんだよ」

「へっ」

恵子の説明を聞いて、「確かにあの2人、なかなかいいコンビだな」と、一美は思った。

寝言は寝てから言いなさい（後書き）

どうもcancelerです。

第3話を読んで頂きありがとうございます。

すみません。魔法はまだ出ません。とりあえず啓介と一美の日常での出会い。次回は非日常での出会い・・・までいけるといいなあ。

こんな拙い文章ですがこれからもよろしく願います。

現実を教えてあげなさい

5月10日、金曜日

一美が転校して数日が経ち学校にも慣れてきたころの昼休み。

「なあ、例のあれ（・・・）明日じゃなかったか？」

集まっていたわいも無い話をしていると、徹也が唐突に言ってきた。ちなみに集まっているメンバーとは、一美、未来、恵子、徹也、啓介の5人。もともと仲がよかった4人の中に一美が入った形となり、転校初日からよく話しているメンバーだ。

「あゝ例のあれ（・・・）ね、でも単なる噂じゃないの？」

未来が答える。

「いやいや、3組に親があそこで働いているやつがいてそいつから聞いたんだけど、本当に出たらしいぜ」

「あたしも部活の後輩から聞いたことがある」

「えっ、それじゃほんとに出るのかな」

内緒話でもするように声のトーンを落とす徹也に恵子と未来もつられていく。

「ねえねえ佐上君、例のあれ（・・・）って何？ 出るって？」

何のことが分からない一美は、唯一会話に参加していない啓介に尋ねた。

「ああ、島倉はこの町に来たばかりだもんな。この町の南側を再開発しているのは知っているか？ その工事現場に出るって噂だよ、お化けが」

「お化け？」

「そう。なんでも突然現れては周辺の建物や工事の機材を壊しているくんだって」

「誰かの悪戯じゃないの？」

「どうだろな、俺としてはどっちにせよ関わらないのが一番だと思う」

「どうい…」

「馬鹿言え。あんなの人間業じゃない。コンクリートが粉々になったり、ダンプカーがひっくり返ったり、絶対お化けとかの仕業だって」

「どういうこと？」と一美が訊こうとしたのを遮ったのは、徹也の声だった。

「お前、見たことがあるのか？」

啓介が訊く。

「ないけど……でもおかしいと思わないか？ 5年前にあったガス爆発事故、その後2年かけて少しづつ復興しかけていた再開発地区が3年前に1夜にしていきなり振り出しに戻った。その原因は未だ解明されていない。その後も約2ヶ月ごとに小規模なものこうやって再開発地区が破壊されている。こんなの普通じゃないぜ」

「工事関係の人も最初は悪戯だと思っただけで捕まえようとしたらしいんだけど、そのとき見たんだって。真っ黒であたしたちの2倍くらいある巨大な化け物を」

恵子も徹也を援護するように続ける。

「……」

啓介が何も言わないのを見て、徹也がこう言った。

「行ってみないか？」

「何時」「何所へ」「誰が」が抜けた問いかけだったが、徹也が何を言いたいかは全員に理解できた。

「止めとけて、危ないぞ」

真っ先に啓介が反論する。寡黙で自己主張の少ない啓介からすればめずらしい。

「そうよ、啓介の言うとおりだわ」

未来も啓介に合わせる。

「大丈夫だって。ちよつと行っただけだから」

「あたしも徹也にサンセー」

「ちよつと恵子！」

「何も起こらないって。未来は心配性だなあ。それに胆試したくて面白そーじゃん」

啓介と未来、徹也と恵子で見事に2対2。こういう場合矛先が向くのは、

「一美はどっち？ 行きたい？ 行きたくない？」

恵子が訊いてくる。

「えっと……」

突き刺さる8つの視線。（本当珍しいことに啓介もある）

「……えっと……ちょ、ちょっとだけなら大丈夫……なんじゃ……ない、かな」

躊躇いながらも一美は言った。言ってしまった。

~~~~~

その日の帰り道。

自宅の前たどり着いた啓介は門の前に一人の少女が立っているのを見た。

黒を基調とした服装にレースやリボンでコーディネートしてある、いわゆるゴシックローリータ。

色白で感情をあまり出さない顔と合わさって、人形のようなだ。

「こんにちは、メメさん」

彼女の名前は飯塚 メメ（いいつか めめ）。このような姿をしているが、啓介よりも年上である。

「遅い」

「すみません」

別に約束をしていた訳でもないのだが、そんなやり取りをしつつメメを家に上げる啓介。メメのほうも自分の家のようにリビングに入っていく、ソファに腰を下ろす。

「コーヒーでいいですか？」

「ああ」

啓介はメメにコーヒーとクッキーを出しつつ、向かい側に座り自分の分を飲む。しばらく無言の時間が過ぎた。

「それで、どうしたんですか？」

メメがコーヒーを飲み干したのを確認した後、啓介は切り出した。

「明日の件だ」

メメは手に持っていたカップを置いて答える。

「何か見えた（・・・）んですか」

「良くないことが起こる」

途端、啓介の顔が苦々しいものになる。

「まあ、そんな予感はありません。明日、友人が来ます」

「止めさせるべきだ」

「難しいですね」

徹也や恵子は一度決めるとなかなか意見を曲げない。そのことを知っている啓介は頭を抱えながらそう言った。

「延期は？」

目的語が無い問い。

「もう少し早ければ可能でしたが、今からは無理です」

「ならばやるべきことをやるしかあるまい」

「……そうですね」

啓介がそう言ったのを再びカップに口をつけメメ。その姿は、会話の終了を示していた。が、

「空ですよ」

啓介に言われて赤面するメメ。

そんなメメに苦笑しつつコーヒーを入れなおすために台所へ向かった。

~~~~~

5月11日。土曜日。午後5時半。

5人は駅前のファミリーストランの中にいた。

「えっと、何で私たちこんな所にいるの？ お化け見に行くんじゃないの？」

そう訊いたのは一美だった。

「あれ、言ってなかったっけ。そのお化けが出るのは工事が終わって人が居なくなってから。つまりは8時過ぎだろうね」

徹也はコーラを飲みながら言う。

「まあ再開発地区は町の反対側だし、こうやってみんなで集まって少し早めの晩飯食って、少し喋って7時過ぎぐらいに電車に乗ればちょうどいいくらいなんだよ」

「って私が言ったのよ。流石に現地集合は無理よね？」

得意そうにする徹也に未来が言う。

「お前はまた余計な事を！」

「あら、本当の事じゃない」

険悪なムードになっていく2人。

「じゃあもう1個質問。何でお化けが出るのが今日だって分かるの？ なんかお化けて神出鬼没のイメージがあるんだけど」

何とかして食い止めようと、一美は訊いた。

「いくつか法則みたいなのがあるんだよ。1つはそのお化けは2ヶ月ごとに現れるってこと。もう1つは土曜日、それも第1第2土曜日に集中していること。あとはさっき言った8時過ぎってことだね。これらの条件を満たすのは、先週と今週の土曜日。で、先週には何も起こらなかったから今日の可能性が高いってこと」

徹也が説明する。

「まあ確証があるって訳じゃないんだけどね。俺の推測さ」

「でも筋は通ってるよね。頭が良いと錯覚しちゃいそう」と恵子。

「錯覚じゃないさ。なんてったって俺の成績は学年トップ……」

「はいはい、調子に乗らない」

「すみません」

徹也と未来のいつものやり取りを見つつ、一美は「お化け」の話

題になってから全く会話へと入ってこない見た。

啓介は驚いた表情をしていた。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。徹也の話を聞いて少し感心していたんだ。頭の切れるやつだなんて」

「ありがと〜啓介〜。俺のことを素直に褒めてくれるのはお前だけだよ」

「啓介、甘やかす必要は無いわ。現実を教えてあげなさい」

「お〜お〜、相変わらず未来は徹也にきびしいなあ。この前だつて……」

「ちよつと止めてよ恵子！」

3人が立て続けに会話に入ってきて話は逸れていったが、啓介の表情が一瞬苦々しいものに変わったのが一美には印象的だった。

その後啓介が「そろそろ電車の時間だ」といったので、5人は駅へと向かっていった。

現実を教えてあげなさい（後書き）

どうもcancelerです。第4話を読んでいただきありがとうございます。なかなか話が進みませんが、次回タイトルにもある指輪の魔法が登場します。と、言い切って自分にプレッシャーをかけつつ今回はこの辺で。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

そしてそれは現れた

再開発地区。

羽柴市南部で5年前に起こったガス爆発事故の被害地の名前である。

当時、工場や発電所といった建物が立ち並んでいたその土地を半径4kmに及ぶ爆発が襲った。

町の4分の1を更地に変える爆発だったが、幸い（というより奇跡に近い）怪我人は多数出たものの、死者は10人にも及ばなかった。

その土地を町の発展に役立てようと、再開発を始めた市民。しかし、2年前、今度は原因不明の爆発が再び再開発地区を襲った。

3年間の工事を全て無に返した。その爆発の後も、何度か工事現場が破壊されることが起こったが、市民から工事の中止を訴えられることを恐れ、市は公表しなかった。

しかし、噂がたたないわけが無い。再開発地区の別名は、昔工場だったのと併せて「お化け工場」とも呼ばれている。

そんな再開発地区を一美たち4人は歩いていた。
なぜ4人か。

「それは啓介が逃げたからだ」

「進藤君、誰に言ってるの？」

「あいつがこんなにチキンだとは思わなかったぜ」

一美の言葉を見殺しして徹也は続ける。

「今時『親戚のおばさんが倒れた』なんて嘘でも言わないっての」
事の顛末はこうである。

電車から降りて現場に向かう際、啓介の携帯に着信が入った。本人曰く「親戚のおばさんが倒れてしまい今からそちらに向かわなけ

ればならない。故に再開発地区に行くことが出来なくなってしまった」というものだ。（明らかに嘘であるとわかる様子に、4人は「怖いんだな」と共通の認識をもった。）そして啓介は駅へと走って行ってしまった。

そんなことがあったものの、予定通り再開発地区の中に入って（『立ち入り禁止』の看板は当然のごとく無視）歩いている4人。

時刻は午後8時半過ぎ。月は出ているものの辺りは暗い。各自が（未来の指示で）持ってきた懐中電灯を点けている。

「夜の工事現場ってだけで既に不気味ね」

Tシャツにジーンズという動きやすい服装の上から薄手のパーカ―を羽織った格好の未来が呟いた。

「本当だな。いかにも何か出そうな感じだ」

徹也が楽しそうに答える。彼はカーゴパンツにタンクトップという格好だ。上から着ていたシャツは歩いて暑くなったため今は肩に掛けている。

「そんなこと言わないでよ。本当に出たらどうするのよ」

未来のパーカーの裾を掴みながら一美が言う。彼女は未来と同じような格好に、ピンクのキャップ帽を被っている。

「あらあら？ 一美ってば怖がってる？ 大丈夫だよ。何かあったら私が守ってあげる」

制服姿の恵子が言った。因みに何故彼女が制服なのかというと、部活の終わった後であるからであって決して彼女が「普段着」制服」という思考回路の持ち主なわけではない。

4人は楽しそうに話しながら歩みを進めていく。

これから起こることも知らずに……

~~~~~

4人と別れた啓介はというと、本当に家に帰った……のではなく、遠回りをして再開発地区の中に入っている。彼は一美たちがいる場所から更に南にある資材置き場のような開けた場所に腰を下ろして電話をしている。相手はメメ。内容は……謝罪である。

「メメさん、機嫌を直してくださいって」  
「嫌だ」

原因は電話。4人と別れるためにメメに電話を頼んだのだが、その際に「親戚のおばさん」と言ったことをメメは怒っているのだ。  
「メメさんのことを言ったわけではないんですって」

「君から見れば私はおばさんか」

話がかみ合わない。4人と別れた後からずっとこの調子である。

「今度何か奢りますから」

「物で釣る気か？」

「決してそういう意味では……」

「……まあよい、許してやる。そろそろ時間だしな」

「8時56分。残り4分ですね。では、そろそろ始めます」

「健闘を祈る」

「健闘を祈る」なんて言葉はメメに最もふさわしくない言葉だと思いつつ電話を切る啓介。

ポケットに携帯をしまいつつ別のものを取り出し右手に嵌める。

それは、銀の台座に真つ玄な宝石がついている指輪だった。

瞬間、啓介の纏う空気が変わる。

魔力の体内循環……正常。

現容量は最大値の約42%。

使用可能量の算出……終了。

使用術式の確認……終了。

全て問題なし。

自らの状態を確認する。そして、

「結界展開」

啓介のいる資材置き場が世界から切り離される。これによって内  
結界の中  
で起こることは外の世界には決して感知されなくなった。

「武器開放」

啓介の右手に60センチほどの小太刀が現れる。

「ふう、準備はできました」

啓介が呟くと、

「こちらも完了した」

返事があつた。メモの声だ。

辺りには誰も居ない。

「しかし大層な結界だな。念話を通してにくくて仕方がない」

「すみません。で、あいつらは今何所に？」

「ああ、君の友達は今入り口から東のほうへ真っ直ぐに歩いている。  
近づいてきては無いから安心しろ」

「ありがとうございます。しかし、さすがは千里眼。助かります」

「こんなもの、十里眼程度だ」

啓介の言う「千里眼」とはメモの使う魔法であり、大きく分けて  
2つの能力がある。1つは「時系眼」。土地や人の過去や未来を視  
ることができる。もう1つは「望遠眼」。今メモが使っているもの  
であり、遠くのものを見ることができる。

ちなみに「念話」とは、魔力による通話のことである。

「さて、9時まで残り5秒」

「始まるか」

4

3

2

1

そしてそれは現れた。

地面のあちこちからいくつもの黒い塊が湧き出る。

それは徐々に人の形をとっていく。

2メートルを越す体躯。

全身が禍々しい黒色。

唸り声がその完成を伝える。

その体が触れた部分から壊れていくコンクリート。

人の形をしているものの、どう見ても「化け物」としか言いようがなかった。

「出たな、破壊神」

啓介は走り出す。小太刀を鞘から抜き、化け物の1体に向かう。化け物は啓介に気づいて顔をこちらに向けて腕を振り上げる。

「遅い」

振り下ろしてきた腕をかわしつつ、懐に入って一閃。胴体を真っ二つにした。

血は出ない。元々魔力の塊であるので、出るはずもなかった。

「まずは1体」

そう言っている間にも化け物は湧き続ける。

夜はまだ長い。

そしてそれは現れた（後書き）

どうもcancelerです。

第5話を読んでいただきありがとうございます。

魔法が出ます。と前回言っていたのですが、最後のほうに少しだけでしたね。

これからも頑張りますので、よろしくお願いします。

ご意見感想などお待ちしております。

## 大丈夫

「ふう、終わったかな」

最後の「化け物」を無に帰してから啓介は初めて立ち止まる。

10時20分。啓介はあれから1時間と20分の間ずっと湧き続ける「化け物」を消し続けていた。その数は3桁に達するかもしれない。

戦場となった資材置き場は1時間前には想像もつかないほど破壊されている。建築物は倒壊し、鉄骨は鉄屑に変わり、クレーン車があつたところにはクレーターができている。

「お疲れ様」

「ええ、ここまでは順調です。万事予定通り」

メメが念話で話しかけたのに対し、周囲を警戒しつつ答える啓介。そう、ここまでは何事も無い。

しかし、昨日メメは言った。

「良くないことが起こる」と。

メメがそう言った以上——「千里眼」を持つメメがそう言った以上——良くないことは絶対に起こる。

防止は不可能。

予防は無意味。

回避などはもつてのほか。そういうものだ。

だから、

起こった後、それをどこまでマシな良くないことに出来るかが勝負所となる。

「とりあえず後10分で奴の結界も閉じるから、起こるならその間。メメさん、あいつらはどうしてます？」

友人の様子をメメに訊く。

「大丈夫だ。今はもう出口に向かって歩き出している。……しかし不思議なものだな。こうやって非日常が繰り広げられていた戦場の

すぐ近くでは、日常が繰り広げられている。私たちと彼らはすぐ隣に、いや、重なっていたとしても決して交わることは無いんだろ  
うな」

どこと無く楽しそうなメメの声。

「そうであってほしいですね。……訂正。そうでなければ駄目です。彼らは此方側に来る必要が無い。来てはいけない。俺が来させない」

啓介は静かにそう答える。その瞳には啓介の決意が読み取れる。

「しかし……えらく饒舌ですね。何かありましたか？」

啓介がそう尋ねると、

「ああ……良くないことが起こったからな」

メメの言葉と同時に獣の唸り声が再開発地区に響き渡った。

啓介は走りだす。

「ばかな。結界の外に出来るなんて」

これまで何度かこうやって「化け物退治」をしてきたが、事前に資材置き場を囲むようにして展開した結界の外に現れるのは初めての  
ことだ。

あの「化け物」は魔法に惹かれる。

啓介は「化け物退治」の際はいつもあの資材置き場に結界を張り、啓介を餌とすることによって、化け物を結界の中に閉じ込めていた。被害を拡大させないために。効率よく消し去るために。無用な来訪者を防ぐために。

なにより今回は、友人を巻き込まないために。

それなのに……

「キャーーーーーーー」

悲鳴が響き渡る。

~~~~~

時間は少し遡る。

10時を過ぎた頃。

一美たちは来た道に戻っていた。

「結局何もいなかったな」

「疲れただけだったね」

徹也の言葉に恵子が反応する。

2人のテンションは低い。別にお化けが出なかったことに落胆しているのではない。ただはしゃぎ過ぎただけだ。

少し前も歩きつかれたといって休憩していた。

「そりゃあれだけ動き回ったら疲れるでしょ」

未来があきれた声で言う。

「でも楽しかったよね」

これは一美だ。

「まあそうだな」

「楽しかったね」

「まあね」

三者三様の返事。

「佐上君も来ればよかったのに」

「明後日、皆でからかってやろうぜ」

楽しそうに徹也が言う。

4人には笑いが絶えなかった。

「あれ？ 一美、帽子はどうしたの？」

突然、未来ちゃんが訊いてきた。

頭を触つてみると……帽子が無い。

「あちゃー、どこかに落としたかな？ ちょっと探してくる」

「危ないよ、皆で行くよ」

私がそういうと恵子ちゃんが心配そうに言うてくれた。

「大丈夫。さつき休憩したときにはあったの覚えてるから。」
私はそう言つて来た道に戻りだした。

「あつたあつた」

帽子は予想通り、そんなに遠くないところに落ちていた。周りが暗いせいで、未来ちゃんたちの姿は見えなくなっているけど、懐中電灯の明かりは届いている。

私は帽子をかぶった。ピンクのキャップ帽。私のお気に入り。そして皆のほうに歩き出したとき、

後ろに何かいるのを感じた。

恐る恐る振り返って見る。

そこには、黒い塊があつて、

だんだんと、人の形に、なつていって、

グルウウウウグワアアアアアアア

そんな叫び声をあげた。

私は恐怖で、動けなかった。

その場にへたり込んでしまった。

それは、ゆつくりと、まっすぐに、私に向かってくる。

「大丈夫か！」

進藤君が走って来るのが視界に入る。

「来ちゃ駄目！」

と言おうとしたけど声が出ない。

化け物が腕を振る。

砕けたコンクリートが進藤君に当たる。

「キャーーーーー」

誰かが叫んだ。未来ちゃんかな。

化け物が私に向かって腕を振り上げる。

私の頭に浮かぶ「死」の文字。

ああ私、死んじゃうんだ。

嫌だな。

怖いよ。

誰か、

助けて……

腕が振り下ろされる。

恐怖に目を瞑る。

そして、

確実に私を殺すだろう、

衝撃が、

……

来なかった。

代わりに、

「大丈夫か？ 島倉」

声がした。

私は恐る恐る目を開ける。

そこには、

私を殺そうとした化け物がいて、

それと私の間に、

まるで私を守るかのように、

佐上 啓介が立っていた。

「佐上…君」

やっと声が出せるようになった。

「怖かったろ、もう大丈夫だから。安心しな」

彼は私にそう言っただけ物と対峙する。

化け物は何度も腕を振り下ろすが、まるで見えない何かに阻まれるように、彼には届かない。

彼はゆっくりと化け物に向かっていき、手に持った長めのナイフみたいな刀で化け物を真っ二つにした。

「終わったよ」

彼はそう言ってこちらを向く。
助かった。

どつと、安心感が襲ってきた。

「おい、何泣いてんだよ」

佐上君が困ったように言ってくる。

「え？」

私は頬を触ってみる……濡れている。

「えっと、その、ごめん。なんか、何で泣いてるんだろ、私」

泣き顔を見られるのは、少し恥ずかしい。

「…ほら、帰るぞ」

佐上君の声に私は立ち上がろうとして……

「……」

「どうした？」

「えっと、腰が抜けて……」

とても恥ずかしかった。

大丈夫（後書き）

どうもcancelerです。

第6話を読んでいただき、ありがとうございます。

とりあえず、5月11日は終わりです。

この夜が、啓介と一美の本当の意味での出会いとなり、2人のこれからを変えていくものになります。

次回は、5月12日の日曜日の話です。

また読んでいただければ幸いです。

では、今回はこの辺にて。

フォア・フォウ・フラウ

「やつほ、こんなところで会うなんて奇遇だね」

これが不審者の第一声だった。

5月12日、日曜日。

昨日の恐怖体験の後、家に帰ってお風呂にもはいらずにベッドに倒れるかのようにして眠りにつき、お昼まで寝てたらお母さんに叩き起こされた。

頭をすっきりさせるのにシャワーを浴びて朝昼兼用の食事をとった後、独りで昨日のことについて考えていたら電話が鳴ってた。

「はい、島倉です」とでると隣の家のおばさんからで、「あつー美ちゃん、あなたのお家の前に変な人がいるわよ。警察に連絡した方がいいわ」と言われた。

窓から外をのぞくと……確かにいた。玄関の前の電柱の影に。あれは確実に不審者だ。

私は外に出られる格好に着替えて玄関から外に出る。するとその不審者は近づいて来て、こう言った。

「やつほ、こんなところで会うなんて奇遇だね」

……全然奇遇じゃないよ。佐上君……。

~~~~~

「昨日はすまなかった」

この一言が口切りだった。

ちなみにここは佐上君の家。

あの後「話がある」と言われてここに連れて来られた。

「お前達を巻き込むことにはならないと思っていたんだが、詰めが甘かった」

頭を下げ、心底すまなそうに謝ってくる佐上君。

私はちよつと困った。

「えっと……顔を上げて」

佐上君は動こうとしない。

「ほら、怪我とかはしてないから。ね？」

そう言うとうとう顔を上げてくれた。

「あれは何だったの？」

私がそう訊くと佐上君は何ともいえない表情をした後、ゆっくりと話し始めた。

「あれは…この地に眠る魔神だよ。名を破壊神。かつてこの町をその名の通り破壊しまくった化け物だ。5年前のこと…あいつらから聞いてるだろ？ 再開発地区のガス爆発のこと」

もちろん聞いている。

羽柴市南部が再開発地区になった原因の事件のことだ。

「あれはガス爆発なんかじゃない。破壊神がやったことなんだ。そして、俺の父さんが破壊神と戦った。父さんは魔法使いだったからな。んで、そのときに父さんが破壊神を封印した。父さんが死んでしまったから俺が引き継いだ。ここまではOK？」

「ごめん…ついて行ってない。じゃあ…昨日は封印が解けたってこと？」

「それは違う。あれは封印を解いたんだ。封印っていつでも完全じゃない。ずっと放置していると、奴は周囲の魔力を吸収して力を蓄え、いつかは封印を破ってくる。そうさせないために定期的にこっちから封印に穴をあけて魔力を放出させてるんだ。お前が見たのはその魔力の塊ってわけ」

言っていることの半分も理解できない。

「初めから話さないと駄目だ。その娘、ほとんどわかってないよ」  
後ろから声がした。

振り向くと、ゴスロリファッションをした少女がいた。

「こんにちは、メメさん。昨日はありがとうございました。」

佐上君が挨拶をする。

「こっこんにちは」

どう見ても私や佐上君の方が年上に——少女はせいぜい12、3歳といったところだろう——見えるのにどうして敬語を使うのかを不思議に思ったが私もそれにあわせる。

「こんにちはそしてはじめまして、フォア・フォウ・フラウ」

「？ フォア・フォ……？」

「フォア・フォウ・フラウ、ドイツ語で美しいお嬢さんって意味だね。ちなみに彼女は飯塚メメさん。まあ、俺の知り合いってことで佐上君が助け舟を出してくれる。」

「私のことはメメでいいわ。じゃあ、何か飲み物をもらうから」

そう言って部屋から出ていくメメ……さん？

「ねえ、あの娘私たちより年下よね。何で敬語？」

メメさんがいなくなっただころで私は佐上君にそう聞いた。すると彼は可笑しそうに、

「メメさんは俺らよりずっと年上だよ。たぶん10歳以上……。そしてメメさんも魔法使いだよ」

「そうよ」

~~~~~

その後は延々と荒唐無稽なファンタジーの話が聞かされた。

曰く、この世界、いやこの日本には魔法が存在する。

正確には存在した。

その昔、魔法は日常的に存在し、人々は魔法と共に生活してきた。魔法は誰でも使えるもので、魔法なしの生活など考えもしなかった。

しかし、それは日本だけだった。

世界に目を向けると、魔法を使えるのはこの国の人間だけだった。この国では常識、日常であるはずの魔法は、世界にとっては異形

のものであり、非日常だった。
故にこの国の人々は、思った。

「我々は選ばれたものだ。神の使いだ」と。

選民思想とでも言うのだろうか。

そんなくたらない《……………》思い違いからこの国は世界に戦争を仕掛けた。

そして敗北。いや、勝ち負け以前に勝負にならなかった。
人数とかそういう問題じゃない。

魔法が発動しなかった《……………》のだ。

日本から少しでも外に出ると、発動しない。
人々は絶望した。

それで、終わるはずも無い。

世界からは恐怖の目で見られることになる。
世界に対しては何も出来ないのに。

力をもっているから。

それを一度でも向けようとしたから。

日本は世界から孤立する。

それを恐れた当時のトップたちが魔法の封印を考えた。

魔法の利益より、世界との関係を選んだということ。

それは、正しかったのだろう。

そして、魔法を封印した。

魔法は永久に失われた……………はずだった。

しかし、そんなことが出来るわけがない。魔法そのものを魔法で封印するなんて。

もし出来たとしたら、封印された瞬間にその封印自体も消える。

表向き、魔法は消えて、日本人は世界と平等になった。
しかし裏では魔法は存在している。
魔法使いは存在している。

啓介のように。メメのように。

~~~~~

「とまあ、こんな感じかな」

そう言っ て啓介が締めくつた。

あれから3時間は経っている。

メメは「疲れた」といつて先に帰ってしまっていた。

「……………」

一美の3点リーダー4つ分の反応。

「…………えっと、わからないとこあったら質問どうぞ」

「わからないというより、信じられないわ」

そりやそうだと啓介は思う。

「じゃあ証拠を見せるよ」

そう言っ て啓介はポケットから指輪を取り出す。

「これが魔法を使うのに必要な指輪。これを嵌めることで、体内にある魔力を魔法に変えるんだ」

「へ」

「じゃあ、何をしようか？ リクエストをどうぞ」

「じゃあ…炎を出してみて」

「了解」

そう言っ て啓介は目を閉じる。

指輪をはめた右手を前に出し、

「火炎」

右手に複雑な模様の円が出来た後、火の玉が現れる。

「こんなもんかな。俺は火は苦手なんだが、得意な水ならほら……」

招水」

そう言って今度は左手に水を出してみせる。

「すごい」

それはありきたりかもしれないが、一美の素直な反応だった。

~~~~~

帰路。

一美は今日の話を思い返していた。

「あんな話、信じられないよね」。でもほんとに魔法使ってたしな

」

なんて一人で呟いている。

ふと、疑問が生じた。

「あれ？　何で私だけ？　どうして未来ちゃんたちも呼ばなかったんだろ？」

「それは、君以外は巻き込まれたただけだからよ」
不意に、後ろから声がした。

~~~~~

まあ、とりあえず話したことは話したかな。

一人になった啓介は今日の話を振り返ってそう思う。

所々嘘もあつたが、大筋はあんなもんだ。

しかし、

「フォア・フォウ・フラウ、あれは美しいお嬢さんなんてそんな意味じゃないあれは……」

~~~~~

「……メメさん？」

なにを言っているのかわからない。今日は散々不思議な話を聞いたが、これだけは心の底からわからない。

「彼女たちは被害者。でもあなたは違う。昨日の事件あなたのせいで起こったのよ」

「何を……いつて……るんか？」

「言葉通りの意味よ」

そう言っただけで彼女は背を向け、

「それじゃさようなら厄災を招く少女《フォア・フォウ・フラウ》」
次の瞬間にはその姿は無かった。

フォア・フォウ・フラウ（後書き）

どうも、cancelerです。

少し間が開いてしまいました。

待っていて下さった方はすみません。

第7話です。

今回は魔法について、ただし不明瞭な点も少し残してあります。

それは、少しずつ紐解いていきたいと思います。

では、今回はこの辺で。

次回はもっと早く更新できることを願いつつ。

あつ、ご意見ご感想、質問などがありましたら、頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2525i/>

指輪の魔法

2010年10月15日19時15分発行